

「八郎潟文学散歩」の面白さ

谷口吉光（秋田県立大学）

八郎潟と文学？ 何それ、全然関係ないじゃない。そう思う人も多いでしょう。そもそも八郎潟はもうないし。残った八郎湖は水が汚いという話ばかりだし。

そう、いつの間にか、八郎潟と八郎湖をめぐる話題は「水質」と「アオコ」ばかりになってしまいました。なぜ、そんな情けないことになったのでしょうか。干拓前の八郎潟を知る人たちは、潟で泳いだ話やシジミを取って晩のおかずにした話を楽しそうに語ってくれるのに。

八郎湖にまとりついたネガティブ（否定的）なイメージを払拭したい。そんな思いで、仲間と一緒に「八郎潟・八郎湖学研究会」を立ち上げたことは本欄でも紹介しました。この研究会の活動として、去る7月28日に「八郎潟 文学散歩」というイベントを行いました。

与謝蕪村、幸田露伴、正岡子規。そんな有名な文人たちが八郎潟を訪れ、作品を残していることをご存知でしたか。かくいう私も知りませんでした。この日、28人の参加者に八郎潟の文学的価値を教えた下さったのは、県立大学の同僚で近現代日本文学を研究している高橋秀晴さんと地元八郎潟町の「寒鮎俳句会」の方々でした。

蕪村が近くで泊まったという諏訪神社、子規が八郎潟を眺望したという三倉鼻。その場所をみんなで訪れ、景色を眺め、句碑を読み、配布資料で著者の原文を読み、解説を聞く。それだけで、私自身が蕪村や子規の目を通してその場所を見ているような、不思議な気持ちになりました。特に、三倉鼻には何度も来たことがあったのですが、子規の「はて知らずの記」を読みながら、「男鹿の本山のあのあたりに夕陽が沈んだんだな」とか、「そのあと虹が見えたというのはあのへんかな」などと重ね合わせて見た風景は、子規が見つないでくれた私と八郎潟の特別な風景になりました。

もちろん、そんな思いは数知れぬ人たちが抱いてきたはずです。和歌の世界でいう「歌枕」は、数多くの歌人がその場所をくりかえし歌に詠み続けた結果、ある「空間」が特別な意味を持った「風景」に変わった場所をいうのでしょうか。八郎潟もそんな歌枕のひとつでした。

私に俳句や和歌が詠めたら、この日の思いを作品にして、脈々と受け継がれてきた八郎潟の風景に連なる一人になれたのに。そう思うと、自分の文才のなさが恨めしく思えました。

干拓前の八郎潟は地域の偉大な存在だったし、今でも私たちが目を開きさえすれば、その偉大さを見せてくれます。たった一日の文学散歩を経験しただけでも、私は八郎潟の偉大さに圧倒され、魅了されました。

（北羽新報「トランジションの風」 2018年8月10日掲載分に加筆・修正した）